様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７２６０

研究課題名（和文）家庭医療におけるケア実践のミクロ社会学

研究課題名（英文）Micro sociology of caring practices in Primary Care

研究代表者
須永　将史（SUNAGA, Masafumi）

立教大学・社会学部・助教

研究者番号：９０７８３４５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，総合診療を行なう「家庭医療専門医」（以下家庭医）を対象に，そのコミュニケーションを解明することだった．具体的には，第一に，医師が患者の主訴をどのようにとらえるのかを目指した．第二に，患者はどのように自身の困難を医師に伝えることができるのかをあきらかにしようとした．そのために，必要な先行研究の整理とその集約，および実際の診療場面の取材，会話分析の手法による分析を行なった．
研究成果として，論文を三本執筆し，学会発表を三件行い，そして英語論文を一件翻訳し発行した．論文のうちの一本は，査読誌に掲載され，ケア実践を身体的相互行為としてとらえ，ジェンダー論にも関わる論点を提起した．

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to elucidate its communication with Primary care of family physician which performs medical treatment. Specifically, firstly, we aimed at how doctors view the main complaint of patients. Secondly, we aimed at how the patients can clarify their difficulties to the doctor. For that purpose, we organized the necessary prior research and summarized it, recorded the actual interview and analyzed it by conversation analysis method.
As research results, I wrote three papers, did three conference presentations, and translated and published one English papers. One of the papers was published in a peer-reviewed journal, caught the practice of care as physical interaction, and raised issues related to gender theory.

研究分野：社会学

キーワード：ケア　会話分析　ジェンダー　総合診療　家庭医　医療社会学

１．研究開始当初の背景

本研究は，総合診療を行なう「家庭医療専門医」（以下家庭医）を対象に，そのコミュニケーションを解明することを目指していた．研究開始時点ですでにパイロット調査を行っていた川崎市の診療所に，継続して調査をし続ける一方，それまで入手したデータを使って論文を執筆することを予定していた．

総合診療として構想される家庭医は，地域に根ざし，患者の家族構成や生活習慣に配慮するという点において，これまでの一次医療と決定的に異なる．とくに，医療と同時に「ケア」という側面が強く，相互行為における性別規範の影響やコミュニケーションそのものの技法の分析の必要性に，医療ケアの実践家もまた注目している点は重要である．

この点で，家庭医と患者のコミュニケーションの研究は，学術的重要性があり，かつ実践的な課題でもあった．

また，調査の過程で，岩手県内の病院で取材する機会を得た．本病院では，糖尿病患者と医師との診断場面を撮影している．これまでおこなってきた総合診療場面と，糖尿病患者の場合とでは次のような共通点がある．すなわち，(1) 継続的な診療が必要なため長期的に通院すること，および(2) 患者の生活や労働環境，家庭環境も考慮して医師は助言を与えるため，コミュニケーションが決定的に重要であること，である．そのため，総合診療場面と糖尿病診療場面とでは，比較に基づいた研究が可能となった．

２．研究の目的

以上の経緯をふまえ，本研究は次のような目的のもと進められた．

第一に，診察においては患者の生活全体を総合的に視野に入れ，特定の治療スキームに限定せずに柔軟かつ根本的な助言を与えることが求められる．それゆえ本研究では，診断の場面で家庭医がどのように患者の問題を理解し，かつ専門家として助言を行なっているのかを明らかにすることである．

第二に，患者は，自身の悩みを打ち明けるにあたって，異性よりも同性のほうがよりよく理解してもらえると考えることがある．それゆえ本研究は，人々が相互に理解するために日常的に用いている性別規範が，どのようなプラクティスによって立ち現れるのかを記述し，それが診療の達成にどのように影響しているのかを明らかにすることである．

３．研究の方法

専門的知識を持っている医師が，患者の来院理由である主訴をどのように受け止め，どのような助言を与えていくのか，家庭医が患者の問題を正確に同定することはどのように可能なのか，会話分析の手法によって明らかにしていく．会話分析は実際の場面でどのような資源がその場面に作用しているのかに焦点を向け，参加者が実際におこなっていること（プラクティス）を，参加者の志向に基づいて詳細に記述するという方法である．本研究にとって CA が他の方法論に対し優れているのは，それが医師と患者の，その都度の相互作用を可視化できるという点にある．とりわけ，患者・医師の発話の行為連鎖に焦点をあてる．会話分析における行為連鎖とは，「質問-応答」のような複数の行為の結びつきが連なることで会話が作り上げられていく仕組みのことである．それを用いて，患者と医師の「主訴の提示-理解の提示」という行為の連鎖を分析する．

同様に患者の主訴の伝え方についても，会話分析の手法を用いて分析する．

４．研究成果

本研究では，医師と患者が，互いに行為を取り交わす中で，成員カテゴリー化装置（すなわち自己や他者をどのように分類しているのかを言葉で表すこと）が明確に使用されていることが観察された．とくに，「患者が父親や母親であること」と「症状や生活習慣にどう対処すべきか」とを関連させながら助言が与えられていることがわかった．これによって，患者のほうも専門的な事柄を理解しやすくなるということも観察できた．具体的には，次のような会話断片が代表的である．

PAT：そうですね　性格が悪いんでしょうね たまにパニクりますけど　だからもうね気がつかないから　いいんですか？こんな話
DOC：うん　なになに もう一回言ってください
PAT：夫がね　あの 私は気がつかないので気が利かないのでやってもらいたいことは言ってくださいって言うんですね
DOC：　ええ ええ
PAT：　だけど　自分で どんどこどんどこやっちゃうんですよ
DOC：　うん
PAT：　そしたらもうパニクるんですよ

ここでは，かんたんにいえば，「診断にとっては余計な話」として導入された話が語りだされている．しかしながら，患者はこのあと，自身の病状と結びつけながらこの話を展開してゆく．医師は敏感にそれを予期し，「余計な話」をうながしている．同時に，この「余計な話」は家庭での夫とのちょっとしたトラブルであるが，医師はこの話を，「妻」として聞いている．すなわち，医師は医療の「専門家」でもあるが，同時に自身も夫を持つ「妻」でもあり，そのようなカテゴリーを持ち出すことで患者の話に共感してゆくのである．医師（専門家）と患者（素人）は医師や患者というカテゴリーだけでなく，老人や女性でもありうる．そして，そのように「相手がどんな人間なのか」「どのようにそこから診療の手掛かりを得るか」を実践することこそが家庭医の顕著な特徴である．これまで

の先行研究で問われてきた「なぜ女性は女性医師を望むのか」という問いは，その参加者がどのような人間で，それが相互行為の中でどのような意味を持つのかを解明することによっても答えられるのではないか，ということが示唆された．事実，本研究で扱った診察の場面において参加者は，様々な表現を使って，自身や他者を分類し，それによって相互行為を達成していた．以上を踏まえ，記述を重ねることで，「女らしさ」や「男らしさ」などに還元せずに，「共感」や「傾聴」などのケア実践が「うまく」達成される具体的な「やり方」があきらかになることをあきらかにした．

ほかにも，これまで収集してきたデータを分析することで，医師あるいはケアラーによる共感的なプラクティスを解明することができた．この知見は，家庭医場面にも関連する知見である．具体的には，医師による甲状腺内部被ばく検査結果を「先取り」して伝えることによって，「悪い知らせ」にまつわる一般的期待による来院者の不安への対処がなされていることを明らかにした．

また，福島県内のボランティア支援の相互行為において，ケア実践のように身体が接触する対面的な相互行為のなかで，性別が参与者の焦点となる際，参与者がそれをどのように扱うのかを解明する．すなわち，参与者が女性であることや男性であることが参与者にとって意味を持つ場合，その意味づけはどのようなプラクティスをとおして処理されるのか，足湯ボランティア活動を例にその一端を解明した．とりわけ，実践上のプラクティスとしていえたのは，性別を話題化し，語る対象とし，さらにはそれを利用しながら冗談を構成し，「笑う」対象とすることだった．「冗談」の構成は，親密さや感謝を「適切に」伝えることや，「気詰まり」を回避することに資する．つまり，あえて話題化し冗談にすることは，ケアの両義性を「解決されなければならない問題」としてシリアスに前景化するのではなく，現時点では問題のないものとして扱い，むしろ他の問題の解決のために活用すらしうることを相互に示せるのである．参与者たちが，うまくきっかけを利用し，話題化してゆくこと，問題のないものとして処理していく「技法」は，あくまでも相互行為の詳細をみながら実践から学ぶことができると考えている．

また，研究の途上で，相互行為における視線やジェスチャーも分析の射程に入れる必要性が出てきた．視線やジェスチャー研究の第一人者であるチャールズ・グッドウィンは研究の初期段階から，録画された会話を対象に分析をおこなっていた．その際彼は一貫して，言語使用とともに，会話で観察される人々の身振り手振り，手の位置，視線など身体のふるまいを記述し，それらが言語と結びつくことによってコミュニケーションが達成されていく精細かつダイナミックな組織を分析の俎上にのせてきた．これを受け，グッドウィンの重要な論文を翻訳し，これを本研究の重要な先行研究として参照する準備を整えた．ほかにも，「見ること」について生態心理学者と社会学者が交わしてきた論争をレビューすることで，先行研究を準備した．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

①<u>須永将史</u>，2018，「身体接触を伴うケア実践における性別の話題化はどのようになされているのか」『福祉社会学研究』15 巻，pp241-pp263.【査読有】

②<u>須永将史</u>，2018，「見ることについての論争――ウェス・シャロックとジェフ・クルターの J. J. ギブソン批判について」『応用社会学研究』60 巻，pp55-pp68.【査読無】

③<u>須永将史</u>・黒嶋智美，2017，「内部被ばく検診結果報告におけるケア実践の相互行為分析」『社会学研究科年報』24 巻，pp7-pp18【査読無】

〔学会発表〕（計　３　件）

①<u>Masafumi SUNAGA</u>，2017，‘Expectation of worry and preempting a conclusion in the interaction of an internal exposure medical examination report’，The International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis.

②<u>須永将史</u>，2016，「内部被ばく検診結果報告の相互行為における身体性と発話――医療場面におけるケア実践の相互行為分析」日本社会学会第 89 回大会.

③<u>須永将史</u>，2016，「ケア実践における成員カテゴリーの利用可能性――家庭医療の相互行為分析」第 27 回日本保健医療社会学会.

〔その他〕

翻訳　　１件

北村 隆憲（監訳），<u>須永 将史</u>，城 綾実，牧野 遼作，2017，「人間の知と行為の根本秩序 ―その協働的・変容的特性」人文学報 （社会学）　513(1) pp35-pp86（著：Charles Goodwin，2013，Charles Goodwin (2013) The co-operative, transformative organization of human action and knowledge, Journal of Pragmatics, 46(1): 8-23.）

６．研究組織

(1)研究代表者

須永　将史　（SUNAGA，Masafumi）

立教大学・社会学部・助教

研究者番号：９０７８３４５７